

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-83C	17-040	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名（原題／訳）		
Breast cancer and exposure to tobacco smoke during potential windows of susceptibility. 胎児期から青年期のタバコ曝露が乳がん発症におよぼす影響について		
執筆者		
White AJ, D'Aloisio AA, Nichols HB, DeRoo LA, Sandler DP.		
掲載誌		
Cancer Causes Control. 2017 Jul;28(7):667-675. doi: 10.1007/s10552-017-0903-1. Epub 2017 May 18.		
キーワード		PMID
乳がん、胎児期、幼少期、受動喫煙、喫煙		28523418
要 旨		
目的： タバコと乳がんの関連を、タバコへの曝露時期に着目した上で前向きに評価する。		
方法： 米国国立環境衛生科学研究所のシスター研究に 2003-09 年に登録された 35-74 歳の米国またはプエルトリコ人女性のうち、本人は乳がんではないが姉妹が罹患している 50,884 人を本研究の対象とした。胎児期、幼年期～青年期（出生-18 歳以下）の受動喫煙、19 歳以後の本人喫煙は電話・郵送調査で評価し、乳がん発症は自己申告に加えて医療記録で確認した。Cox 比例ハザードモデルを用い、タバコ曝露による乳がん発症のハザード比 (HR) および 95%信頼区間 (CI) を算出した。なお、本人喫煙の検討では、アルコール摂取量を交絡因子・作用修飾因子として用いた。		
結果： 平均 6.4 年の追跡期間中に 1,843 人が浸潤性乳がんと診断された。本人の喫煙歴は乳がん発症リスクと関連せず、この関連はアルコール摂取量を調整後も同様であった。一方、禁煙者では、年平均アルコール摂取量が多い群では少ない群に比べて乳がんリスクが 1.44 倍 (95%CI: 1.11-1.85) 高かったが、喫煙とアルコールの間に交互作用は見られなかった。非喫煙者において、青年期 (18 歳) までタバコの曝露を受けた者は、曝露のなかった者に比べて乳がん発症リスクが 1.17 倍 (95%CI: 1.00-1.36) 高かった。また、胎児期の曝露は 1939 年以前生まれでは同リスクが 1.44 倍 (95%CI: 1.02-2.02)、1940-49 年生まれでは 1.28 倍 (95%CI: 1.01-1.62) 高かった。		
結論： 胎児期および幼年～青年期のタバコ曝露は乳がん発症リスクと関連することが示された。		